

Made with AI

召喚士 エストリアと

愉快な仲間たち

試し読み



林愛根

目次

1. 地下迷宮 13 層フロアボス	1
2. グレーシア福音教会	3
3. ザイアース君	5
4. ザイアース君の過去	9
5. 初めての夜	11
5. 朝ごはん、そして出勤	12
7. グレーシア福音教会 2	14
8. フィル VS エストリア	16
9. 地下迷宮 14 層 1	18

1. 地下迷宮 13 層フロアボス

他の人はみんな死んでしまった。ジャックもステファノのレジェンも！　今残ってるのはこの子たちと相方のルミナスだけ。あとはこのふざけきったタコの魔獣を叩きのめすまで！　浮遊しているタコの HP はまだそんなに削れていない、何とかしないと。「ライアス、雷を撃ちまくって！！」

魔鳥は身を翻し、雷を撃ちまくった、タコの魔獣は苦しそうにしているが、まだ効いていないようで、触手を思いっきりエストリアに向けて放った！「危ない！」ルミナスは転移魔法によってエストリアを別の場所に逃がした。そのまま立て続けに詠唱する。

タコ魔獣は攻撃魔法の準備を完了させ、猛毒の霧を放った！　この霧はとてもヤバく魔力を奪い、長く吸っていると死に至ってしまう。神経も麻痺し、動きが鈍くなってしまうのだ。

「メルティカ！　私たちを守って！」

メルティカと呼ばれた大きなスライムは防御壁となり、私とルミナスをかばった。ルミナスの詠唱が完了した。

「ルナティック・フルムーン！！」突如、空間に赤い満月が浮かび上がった。この満月を見た者は、気が狂ってしまう。私は目を背けた。

「ガァァァァァ！！！」タコの魔獣は気が狂ってしまったようだ、浮遊魔術が止み、地に落ちてしまう。

ガッシュァァン！！！！　タコの魔獣は地面に叩きつけられた。私は地上戦に強い召喚獣を思い出し、召喚の詠を唱える。

「深淵に潜む凍てつく氷の牙ギリメカラ、私のもとへ馳せ参じたまえ！！」

「グァァァァァァ！！！！！」氷の魔獅子、ギリメカラが魔法陣から召喚された、白い体毛にたてがみ、オスライオンの彼はエストリアを守るために戦う。ライアスは深淵に帰ってしまった。

ギリメカラは猛スピードで突進し、タコ魔獣に食らいつく、ピキピキピキッとかまれた付近が凍りつきタコ魔獣を困らせる。タコ魔獣は苦しそうに触手を振り回し、ギリメカラを叩きつけて吹き飛ばす。

「ギリメカラ！」私は叫んだ、彼が大丈夫なことは分かっているつもりだがちょっと心配して魔力を込める。呼応するようにギリメカラの体からは生気がみなぎり傷が回復した。ギリメカラはお構いなしに突っ込み、またタコ魔獣にかみつく、タコ魔獣は怒り狂い、触手をめったやたらに振り回した。

ルミナスの詠唱が完了して、また大魔法を放った！「フォールザムーン！！」大きな月が天からすごい速さで落ちてきた。

ドガアアアン！！！！ タコ魔獣は押しつぶされ、反応しなくなった、もう死んだのかな？

「タコ魔獣さん？」私は月の下をしげしげと警戒しながら見つめた。ルミナスの魔法で月が消えると下からクエスト成功の証の大きな魔晶石が一つ転がっていた。これは換金すると大きな金額になりそうだ。お互いレベルが2上がり、私はレベル148、ルミナスはレベル142になった。

「よかった、倒したみたいね。でも犠牲はすごく大きかったわ。ジャックもステファノもレジェンも死んでしまった…。ここにお墓を作っておきましょう、エストリア」

「そうね。ここにお墓を作っておきましょう。私たちと共に戦ってくれた熱い戦友たちを」

私たちはジャックたちの死体を土に埋め、石をそこにおいて、手厚く葬った。彼らのことを考え、涙を流し、感謝を込めて別れを告げた。また天国で会う日を信じて。

ミドルーシ魔法国には埋葬に関する取り決めがあんまりない。葬りたい人は墓に葬り、山に埋めたい人は山に埋め、各個人の心境を大切にする。自然本来のやり方で生きる主の国ミドルーシ、賛否両論あるが、こういうのも悪くないかも。

「よし、死んだ人の分まで頑張ろう。ジャックたちの死は無駄にはさせない。エストリア、下に行く階段に行ってみましょう、そこで、魔力の痕跡を残し、早く教会へ帰りましょうか」

「ええ、そういたしましょう、前を見て歩かないと私たちは！」

私とルミナスは下の階に降りていく階段を見つけ、下に降りて行った。

タッタッタ……、下の階に行くほどムラムラと湿っぽく嫌な空気になっていった。地下迷宮は下の階に行くほど熱くなっているようだ。

階段が終わり、ダンジョン14層に着いた。ルミナスは魔力の痕跡を残し、次に来るときの布石を作っておいた。

「さ、帰りましょうか、テレポーション！！」

ルミナスの魔法で私たちは虚空に消えた、って、私、この魔法使えないんだけど！

2. グレーシア福音教会

ぼわんっー

「ふう、到着っ」とミルキーホワイトの髪のエストリアはルミナスに連れられてここ、グレーシア福音教会のエントランスに来た。ここはギルドのような仕事も請け負っているところで、報酬はギルドよりも高めに設定されている。

「あ、ルミナス、エストリア、無事だったんだね、みんなは!？」受付嬢のリサさんが話しかけてきた、心配してそうだ。

「...他のみんなは死んだよ、ジャックもステファノもレジェンもみんなあのタコモンスターにやられてしまった。私たちだけが生き残って、倒し、ジャックたちは埋葬してきた。彼らの死は無駄にはしない。私たちの明るい未来のために頑張ることにする」私は答えた。

「そうでしたか...明るいジャックも聡明なステファノもやり手のレジェンも.....。.....遺族たちに直ちに報告し、教会として彼らの葬儀を執り行いたいと思います!」

「お願いします、本当にいい人たちがあんなモンスターにやられて悔しいです。私たちの力量不足ということで、これから頑張っていきます」

「そう堅くならないで。彼らが殉職したのは全く君らのせいじゃないから。ただ、神様がもうこの人はここまででいいと線引きしてくれたのよ。あまり深刻に考えないで」

「そんなものでしょうか？　まあ、そうっていただけて嬉しいです、ありがとうございます!」

「お、いつものエストリアちゃんっぽくなってきたね。君たちが浮かない顔してるところまで心配だよ。あまり深刻に考えないでね☆」

「はい！　分かりました。あとあと、タコのモンスターが落とした魔晶石です。大きいでしょう、これ！　換金してくださいませんか？」私はポケットに入っていた魔晶石を取り出した。紫色のアメジストのようにそれはキラキラと輝いていた。

「おお、これは大きな魔晶石だね、重さは...1129 gか...46800LYRE ってとこだね。ではこちらがその代金だよ、受け取ってね☆」

魔晶石は私たちに必要なポーションや魔道具の材料、武器や防具の素材、町を動かすエネルギー等いろいろなことに使われる万能な石。魔物たちが落とすのがちょっと面白いけどw

「はい、ありがとうございます！　今日はもう帰りますので、明日のクエスト、よろしくお願いしますね☆♡」

「はい、明日また会いましょう。主にあって安らかに眠れますように.....」

☆ ☆ ☆

「じゃあ、エストリア、私はもう帰るから、また明日よろしくね☆」

「うん、また明日会おうね、死なないように！」

「あはは、死なないようにね☆ テレポーテーション！！」

瑠璃色の髪のリミナスは虚空に消滅した。この技、私も使いたい！ なんでも記録してあるところと、近くにしかレポートできないらしい。それにたくさんの場所は記録できないみたいだけど…。

（ううん、今できることをやる！ できないことはそのうちできればいい！ 私も家に帰ろうかなあ……）

シュイン☆ー

あ、流れ星だ、お願い事しようかな？ この終末に彼氏ができますように！！

3. ザイアース君

「ふふふ～ん♪ 地下迷宮 14 層到達を記念して、チョコホールケーキを買ってきました～☆♡ ラ・パルンのケーキってとってもおいしいのよね～☆ みんなと一緒に食べましょう、さ、みんな、おいで～☆」

私は召喚の詔を一つ一つつぶやき、召喚獣たちを呼んだ。召喚獣ギリメカラ、召喚獣ライアス、召喚獣メルティカは私のもとに来た。他にも召喚できるんだけど、契約を結んでるのはこの子たちだけなので……。ほんとに可愛い子たち、食べちゃいたいくらい♡

と、ここで私は新たな召喚の詔が思い浮かび、私はすぐに召喚の詔を唱えることにした！

「邪悪なる者の真王、禍々しき力ザイアース、私のもとへ馳せ参じたまえ！！」

部屋によどんだ紫の魔法陣が現れ、その中心より、暗黒の真王が姿を現した。彼は灰褐色の皮膚をして、上半身裸の見るからに悪そうな、最悪な魔族だった。

「お呼びですか、マスター？」

「おおお、お呼びですかって！？？」魔族だ、魔族が現れた！ 怖い！ あ、ギリメカラが威嚇してる。上半身裸って！ 見ちゃうじゃない、どうすんのよこれ！

私は人型の使い魔の原則を思い出した、人型……は召喚者の伴侶になるために現れるのだと。その場合は……。

「はあ……まあいいわ。さあザイアース来なさい、そして目を閉じて……」

「はい、マスター」何この子かっかわいい☆ この子は……

エストリアはザイアースに唇を重ねた。口周辺が熱く、喜びを伝えている。

「ぶはっ。これで契約は完了だよ、ザイアース。あなたは私だけの使い魔だよ」

「……」

ど、どうしたのかしら、嬉しくないのかしら？ 私だって可愛い女の子だと思いますけどお！

「指令は何ですか、マスター。聖都を滅ぼすことですか？ 暗殺したい人がいるんですか？ いずれにしても僕はすごく役立つと思いますよ」

「な、なな、聖都を滅ぼすんじゃなくて地下迷宮と一緒に攻略して欲しくて……。あと私の護衛……」

「それならお安い御用ですよ。ただ仲間を殺すのはちょっと心外だなあ……。俺たちは人間界の崩壊を願っていただけだから」

「なっ、なんでそういうことをするんですか！ めっちゃ迷惑なんですけど！」

「俺たちにいい心なんてないんすよ。愛とか正義とか言ったって分かんないんですよ。それより幸せにしてるやつらの幸せをぶち壊してる方が楽しくて面白いし、その悲愴に満ちた顔を見るのが……」

「やめなさい、ザイアース！　あなたは私の使い魔なんだから、人間のために力を使いなさい。あなたの特技はなんですか、聞いてみたいです……」

「吸収魔法です。まず MP から奪うのが基本で……」

「聞くんじゃなかった！！」なんなのこの子、ヤバい、ヤバすぎるわ！　まあ、かっこいいし、根っからの悪人じゃなさそうだし、私には素直だし、そこはよかったけど……。

「自己紹介がまだだったわね。私はエストリア。召喚士でピアノが趣味です。好きな食べ物はパンケーキ。これからよろしくね☆」

「エストリア……いい名前だな」

「うふふ、ありがとう。ザイアース君もかっこいいね♪」

「う、うん……」あらやだ、照れちゃって可愛いw

「まあ、みんなでケーキを食べましょ♪　ザイアース君はケーキ食べたことある？」

「ない」

「じゃあ食べてみましょ♪　あ～んしてあげる、ほら口を開けて♪　あ～ん」

「あー」

「はい♡」

「あ、ぱくっ、むぐむぐ……うまい、これはうまいなあ！」

「うまいですかw　ケーキうまいですねw」

「エストリア好き……」

「え？……私好き？」

「好き」

「じゃあキスしてあげる。ほらこっち向いて！」

「うん」

「ザイアース君……ちゅ♡」

「ん、エストリア……」

と、その時、メルティカが嫉妬して私に覆いかぶさってきた。この子は私の体が大好きで、私とイチャイチャするのが大好きみたい。メルティカは私のおっぱいをムニムニと揉んでいた。

「な、なんですか、このスライム！　ぶっ殺していいですか??」

「だ、ダメよ！　これは私の召喚獣メルティカ。スライムでエッチなことが好きなの。私の体が大好きなの、分かりましたか??」

「まあ、そういうことならよ、だったら俺も触りたいくらいだぜ」

「え？　少しくらいならいいけど……」ちょっと恥ずかしいけどこれもザイアース君のため、仕方ない。

「ほら、触ってみて♡」私は自分のおっぱいをザイアース君に向けて差し出した、Cカップはあるので小さくはない。ザイアース君は私のおっぱいを揉み揉みしてすごく幸せそう。

「はい、ここまで！　満足できましたか？」

「今まで触ったので一番よかった」えええ、他にも触った子がいるの、今まで何してたんだろ？

「一番で何より♡　ザイアース君は今まで何してたの？」

「魔王とか魔界のエリートとか、とにかく人を殺したり奪うのが仕事だった」

「それは仕事って言いません！ w 詳しく教えて！」

「いいけどよ、少し長くなるぜ」



BCO.364c024e-d0d3-44fb-9aa8-1a1eb8fe3e39.png

4. ザイアース君の過去

チョコホールケーキをみんなで食べ終わると、ザイアース君は口を開き.....

「聞いてくれるか？」ザイアース君が恐る恐る聞いてきた。私は大きくない胸を張り、「うん」とうなずいた。

「俺はな、かつてあったデストラド帝国の元魔王なんだよ」え、あのミドルーシと戦って負けた、あのデストラド.....。確か聖女に負けたって.....。

「そう、俺は聖女に負けた。あいつはすごかった、完全に”聖”属性の技しか使わない、誰が来てもひるまない、俺たちが聖属性の技が苦手だからってあんまりだよな、俺はおろか配下の魔族、魔獣たちはほとんど滅ぼされてしまった。俺は殺され、魔界に落ちた、俺は誓った、ろくでもない人間どもに血の復讐を果たさないとあ！ って」はあ.....もう何を聞いても驚かないわ、聖女アステナって強かったのね、私とはタイプが違いそうだけど、アステナさんの信仰って素敵だなあ、きっと聖書しか読まなくて、福音を伝える働きとか真面目にしてたんだろうなあ！

「聖属性しか使わないってすごいですね、確かに復讐したくなってもしょうがないかもしれませんね」

「ああ、俺を殺すんだからな、許さねえよ、魔界に落ちた俺は認められて魔界帝ガイノスの3柱の1柱、序列は4位の大魔族になった。気力のなえた者からエネルギーを奪うのが俺の仕事で、みんな苦しそうに野垂れ死ぬんだ。あいつらの断末魔を聴くのが.....」

「な、なんですってー！！まあいいです、もうあなたは私の使い魔、受け入れましょう。あなたは私だけの使い魔なんですからね、自覚するように！」

ふっと、ザイアース君がちょっと泣いてしまった。魔王が泣いてる、ヤバイ、キュンって来ちゃう！

「俺はこんなに優しくされたことないからよ。手下も俺を殺そうと狙ってるし、勇者どもは俺を殺そうとするし、ろくな奴はいない。だが、エストリアは違った！ 俺にキスもしてくれるし、ケーキも食べさせてくれる。こんなに優しくされたことはない、エストリアは本当に優しい」

私は大きくもない胸をそらし、「まあ、旦那様に優しくするのは伴侶の務めですからねえ♪ こんなにかっいい旦那様に会えて私は嬉しいです♡ 私は一生ザイアース君を愛します♡」

「エストリア.....」

「ザイアース君.....♡ 私は幸せですよ、こんな旦那様がいて♡ 私たちはいつまでも一緒ですからね！ ♡」

「エストリア.....俺もエストリアを愛するよ.....」

「ザイアース君.....君は今日からルクス君です、今までのことは忘れて、私たちは愛合いましょう。ルクス君.....ちゅ♡」

「ん、エストリア……好き……」私はルクス君の首に腕を回し、熱心に口づけした。ルクス君も一生懸命私とキスしている。

召喚獣たちが怪訝な顔をしている。主人は魔族と愛し合い、熱烈にキスしている。みんなケーキを食べて満足そうだが、ギリメカラもおいてけぼりにされて寂しそうだ。

「わーった、わーった！ ほらみんなこっち来て！ はいいい子いい子、わしゃわしゃわしゃ～、みんな可愛いね～♡」ギリメカラもたてがみをさすられて満足そうだ、ライアスもさすられて幸せそう。メルティカは私の口に体を突っ込み、ディープキスを楽しんでいる。

「俺もしたいんだけど……」私は幸せそうにはにかんだ。

5. 初めての夜

そろそろ就寝時間だ。ルクス君たちと眠りにつくことにしよう。いつもは召喚獣たちと一緒に寝てたけど、今日はルクス君が隣！　ね、ルクス君??

「女の子の部屋.....とても可愛い.....」そうでしょ、そうでしょ？

私の部屋はピンクを基調にしている、可愛い小物たちを飾っている。カップの蛍石のさざれ石にアロマオイルを垂らしてムードを醸し出した。甘いイランイランの香りが私たちを甘い夢に誘う。

「さあ、ギリメカラもライアスもメルティカも一緒に寝るわよ。明日も戦いが待ってるから、みんな心してかかるように！　今日は疲れたし、みんな寝ましょ。ルクス君も一緒に寝よ♪」

「.....」ど、どうしたのかな、ルクス君??

「エストリアとしたい.....」え、私と？　召喚獣たちもいるしなあ、じゃあ.....。

「おっぱい触らせてあげる♪」私は上着を脱ぎ、柔らかい乳房を月明りの下はだけさせた。そしてルクス君の肌にピタッとつけ、「今日はこのまま寝ましょ、大好きなルクス君♪」

ルクス君はエストリアのおっぱいの感触を味わいながらゆっくりと眠りにつくのだった。

5. 朝ごはん、そして出勤

私たちはパンと目玉焼きとウインナーとサラダとカフェオレで朝食を摂ることにした。召喚獣たちにも同じようなご飯をを与えている。召喚獣たちも同じような幸せを受けて欲しいから。とにかく焼いたパンっておいしいわよね。ルクス君も喜んでくれるかしら？「うん、おいしい」ルクス君はおいしそうに食べている。うん、気に入ってくれたみたい。

ルクス君は困惑したような顔を見せ、「なんだか、エストリアに召喚されてから、悪い心が起こらなくなってしまう、魔族として、これでいいのかと困惑している。人を殺したいとか奪いたいが減ってしまい、これでいいのかと思っている」私はその気持ちを受け止めてあげて、

「そう思うだけでもいいのです、あなたには私がいるんだから……ルクス君が悪い子じゃないってこのエストリアにはお見通しですよ♡」

「エストリア……」

ギリメカラたちもお皿をめちゃくちゃにして食事を済ませた。こらっ、誰が片づけると思ってるのー！！　私たちはこの子たちが大好きだった。

☆ ☆ ☆

「俺は教会なんざ行きたくないぜ！！」嫌がるルクス君の手を引き、

「ダメーッ！！　行くのお——っ！！」と私はルクス君を無理やり引っ張っていく。

「俺は聖書が嫌いなんだ——ッ！！　あんなものがあるから俺たち魔族は……」

「ルクス君、いいから行くの——っ！！！」まったくルクス君は手間がかかる。まるで子供みたい。まっ、いっか、可愛らしいし。ルクス君は私の使い魔なんだから大事にしないと。この子は私だけの使い魔なんだから。

地下迷宮は最奥に魔界に繋がるゲートがあるようだ。地下迷宮は魔物や魔族の巣窟で、ゲートを隠すために迷宮化しているらしい。この聖都シャイナータは大結界で守られているので一応安全である。地上の魔族はほとんど淘汰されてしまったが、まだいるので、油断できない。そんなことを思いながら教会へ歩いていると……

「何あれ、魔族よ、エストリアと歩いてる……」「怖い」といろいろな声が聞こえてきた。

ルクス君はつつつかと歩いて、お婆さんに食ってかかり、「てめえ、よくも俺様にそんなことが言えたなあ……後悔させてやる！」

「やめなさい、ルクス君、お年寄りにそんな……、もうちょっと優しく……」

「うるせえ！　俺様の力を見せつけてやるぜ！！」

「ルクス君、やめてくださいね……！！」私はすごんでいった。ルクス君は苦々しい顔をして、掴みかかっている手を離した。

「ルクス君、自分がされて嫌なことはしちゃダメですよ？　あなたは私だけの使い魔なんだから、同じ人にも優しくできるようにしなさい。分かりましたね??？」

「わ、分かったよ、多分もうしない」私はにまにまと笑って「よろしい！」と言った。

7. グレーシア福音教会 2

「おお、ここが憎々しき教会……」ルクス君が教会の建物を見上げ、言った。

「そういうこと言わないの！ さっ、入るわよ」

「もうどうにでもなれだ！ 入ってやるよ、まったく」私は目を輝かせ、

「よくできました、ルクス君、君はほんとにいい子ですね、流石私の使い魔、ほんとにいい子ですね☆」

私たちはエントランスに入った。瑠璃色の髪のルミナスはもう私を待っていた。

「なんで魔族がいるの？」ルミナスはきょとんとしている。

「私の使い魔なのよ～、この子は私と結ばれて夫婦になってるのよ～♡」

「魔族と夫婦？ 大丈夫なの？」

「お、いい女だな、お前、俺の……」

「こら！ ルクス君、浮気は絶対ダメですからね……」私はぎりぎりとルクス君を注意した。この子は徹底的に縛っておかないと何するか分からない。

「わ、分かったよ」

「分かってません、あなたはあなたは私の使い魔なんだから……」エストリアは何でこの子のことがこんなに好きか分からなかった。ただもう魔法がかったようにルクス君が好きで、エストリア自身困惑していた。大切なエストリアの恋心はもうルクス君に奪われていた。

受付に行き、私は教会員の証であるカードを見せ、話を伺った。

「なんで、魔族がエストリアと一緒に来るのですか？」受付嬢のお姉さんは言い放った。

私は事情を説明して、「いや、この子は私が召喚したルクス君です。今は私の使い魔で人に害を与えるような子じゃありません。今は私と愛で結ばれ、この子には良心が芽生えています」

受付嬢のお姉さんは、「なるほど、召喚して使い魔として使役しているのですね。それならあなたの言うことを聞くのはもっともです。分かりました、それならいいです」

受付嬢のお姉さんは納得してくれたぁ～よかった～～♡

「ダンジョン 14 層はとても強い敵で溢れています。今回は護衛としてエルフのフィルも同行させることにします。ただ、もう 14 層ともなると同行できる者も少ないので……。ルクス君もいるし、手分けして下に繋がる階段を探しましょう。よろしく願いいたします」

私は快く承諾して、「分かりました、なるべく早く下に繋がる階段を見つけるようにしますね」

一礼して私たちは受付を離れた。フィルと呼ばれたエルフの子はうやうやしく、私たちに一礼した。フィルはとても大きなおっぱいをしていて、ルクス君はそれを恥ずかしいとも思わず、まじまじと魅入っていた。

私は深い失望と嘆きと独占欲から.....「ルクス君.....何を見てるのかな.....メ」とルクス君を叱り飛ばした。

ルクス君は反省したような顔を見せ、「いや、エストリアのが一番だからな」と言った。

フィルの顔はみるみる赤く上気し、「や、私のおっばいが一番ですぅ〜〜〜メメメ」と言った。

8. フィル VS エストリア

ルミナスのテレポーテーションで魔力の痕跡を残した地下迷宮 14 層へたどり着いた。

14 層はムシムシと暑苦しく、不快な感じがした。

フィルとエストリアはまだいがみあっているようで、目も合わせようとしなない。ルミナスはあきれたように、「そんな風にいると命を落としてしまうかもしれませんよ」と冷静に言った。

エストリアは観念したように「分かったわ、それにしても熱いわねえ」と言った。確かにこのままではよくないことも分かっている。

「この人はルクス君というのですか？　かっこいいですねえ!!」フィルは目を輝かせた。

ルクス君は調子に乗って、「ま、俺にかかれば聖都も魔界もすべて掌握できるがなあ!!」と言い放った。「俺は強いんだ、全員俺に従わせる。逆らうやつは犬のえさだ」「すごいですすごいですすごいです〜♡　ルクス君は言うことが違います〜♡」

エストリアはあきれ返り、ルクス君の腕をつかんだ。「ルクス君は私だけの使い魔。ルクス君と私は永遠に一緒に暮らすの。ずーっとずーっとルクス君と暮らして、二人だけの王国を築くのよ〜〜♡♡」

フィルは驚いて、「な、なんですって〜〜メ　そんなの認めないわ！　私だって私だってルクス君とイチャイチャするんです〜♡」

フィルはルクス君の腕をつかんだ。バチバチと火花が飛ぶ。もはやルクスですら仲良くすればいいんじゃないかと思っていた。

しばらく通路を歩いていくと魔獣の群れに出会った。ソードダンサーが剣をこちらに向けて飛ばしてきた。彼らは骸骨で剣を操ることができるらしい。

俺は剣をひらりとかわし、魔術を詠唱する。詠唱はすぐ完了し、得意の魔法を放った！「リーゼルエルキューサー!!」

「ぶっ、なんですか、その技はあ！ W」フィルが笑っている。

剣は勢いを失い、ひらひらと地面に落ちた。「リーゼルエルキューサーは相手の MP を奪う、俺の基本の技。あと、魔力が下がった相手からァァ!!　スキルスティール!!

フハ、フハハハハハ!!!!!!」

ルクス君の手から剣が出現し、ソードダンサーに向けて剣を放った。ソードダンサーは持ち前の剣で応戦するが、ルクス君の剣に耐えられない。

「フハハハハハ!!!!　そして HP が下がった相手からァァァ!!!!　デッドエンドキル!!!!　フハハハハハ!!!!!!」

もう体力のなかった骸骨はルクス君の即死魔法で、跡形もなく姿を消した。カランと魔晶石が落ち、戦闘終了の合図となった。

「すごいですすごいですすごいですー!!　こんな戦い方初めて見ましたぁーっ!!!!

ルクス君は天才☆ですー!!!!」

「ちょっとフィル、私の使い魔に……。私は妻なんですよ、ねえ、ルクス、今の魔法どうやってやったの？ 跡形もなく消えちゃったけど」私はルクスに聞いてみることにした。

「俺はな、HP が 15 % 以下になった敵を問答無用で即死できるんだ。命を奪うにはこれくらいの体力以下が重要で……」

「最低ですー！ 最低でも強いですう——っ！！」

「ほんと最低だけど、強いわねえw ルクス君は私だけの使い魔ですからね。ちょっと離れて……」

「まあ、エストリアも抑えて……。ここは仲良くダンジョンを攻略しましょ☆ 死んじゃうわよ？」うう…ルミナスが冷静に突っ込んできた。確かにそうかも。

「分かりましたよお、そうすることにします」私は観念して、諦めることにした。

「まあ、俺はエストリアが好きだけどな」え！？ ルクス君……！！ ルクス君は続けて説明してくれた。

「エストリアは俺に愛を教えてくれた。俺と一緒にいたいということであれば、俺もそうしたい。俺は魔族だけど、エストリアへの愛だけはまともだ」この時だけはルクス君が神様に見えた。ルクス君は私のことを想ってくれた！ 嬉しい！！

「ルクス君……ずっと一緒だよ♡」私は天にも昇る気持ちだった。

9. 地下迷宮 14 層 1

「まあ、別にいいですけどお！ お二人は幸せになってくださいねw」フィルは認めてくれたようだ。まあ、仕方ないかw

「はあ、ルクス君かっこよかったのに……。魔族とエルフのハーフって素晴らしいと思うけどなあ！」

「ダメです！ 認めませんからね！」何それ、全力で否定しないとw

「美しいエストリアに忠誠を捧げます。僕は使い魔として全力であなたをお守りしたいと想います」

「ルクス君……!!!」

「ヤバい、メロドラマ化してるわね、魔族と美少女サモナーって絵になるわあ……」ルミナスが嘆息する。

「ベストチョイスでしょお、これえ！！」私たちはベストオブカップルなのよおお!!!

私の魂の叫びはこだました！

通路を歩いていると、モンスターが出てきた。今度は死神のような亡霊とミノタウロスナイトの群れだった。私はすかさず召喚の詠を唱える。

「古き深淵の怒りの雷ライアス、暗黒より生まれし魔メルティカ、私のもとへ馳せ参じたまえ！！」

「グアァ——ッ！！」ライアスとメルティカが出てきた。ライアスは山吹色の可愛い色をしている。

「やっておしまい、ライアス、サンダー乱れ撃ち！！」

「リーゼルエルキューサー！！」

死神はテレポートし、私たちの視界から消えた。ライアスの雷はミノタウロスナイトに直撃した。2体のミノタウロスナイトが消滅した。私は立て続けに雷を放つ。ルミナスは詠唱を続けている。

「眠れる木々よ、目を醒ましなさい！！！」フィルは木々を呼び覚まし、辺り一帯に爆発的に木々が育った。木々はミノタウロスナイトにまわりつき、剣で応戦するものもすごうござうさだ。

死神は HP を半分にする呪いを放ってきた。俺は昔奪った魔法反射でエストリアと俺を守り、死神の HP を半分にしたが、ルミナスとフィルは食らってしまった。そしてリーゼルエルキューサーを続ける。ミノタウロスナイトはもう MP が切れただろうな。

「フルムーンショット！！」ルミナスの詠唱が完了し、白い満月が浮かび上がり、そこから光の筋がミノタウロスナイトと死神を討つ。月の光は見えない敵が見えるようだ。

木々は槍となり、ミノタウロスナイトを襲う。ミノタウロスナイトはそこら中で串刺しの憂き目にあっていた。

「みんな HP が下がったようだなァァ！！ デッドエンドキル！！！！ ヒャハハハハハ！！！！」ルクスの即死魔法で HP15 %以下になったモンスターたちはすべて消滅した。残党も私の雷がすべて一掃する。こうして戦闘が終わり、魔晶石が当たり一面にカランと落ちた。

「フィル、ルミナス、大丈夫？」私は HP を半分にされてしまった、フィルとルミナスをかばった。

「大丈夫です。木々の癒し！！」フィルの放ったヒールが私たちを癒す。「木々の癒しの回復量は辺りにいる木々の量で決まるんですよ♡」

「おお……！」ルクス君が感心している、こら、感心するな！「まあ、別にいいですけどお！ お二人は幸せになってくださいねw」フィルは認めてくれたようだ。まあ、仕方ないかw

「はぁ、ルクス君かっこよかったのに……。魔族とエルフのハーフって素晴らしいと思うけどなぁ！」

「ダメです！ 認めませんからね！」何それ、全力で否定しないとw

「美しいエストリアに忠誠を捧げます。僕は使い魔として全力であなたをお守りしたいと想います」

「ルクス君……!!!!」

「ヤバい、メロドラマ化してるわね、魔族と美少女サモナーって絵になるわぁ……」ルミナスが嘆息する。

「ベストチョイスでしょお、これえ！！」私たちはベストオブカップルなのよおお!!!

私の魂の叫びはこだました！

通路を歩いていると、モンスターが出てきた。今度は死神のような亡霊とミノタウロスナイトの群れだった。私はすかさず召喚の詠を唱える。

「古き深淵の怒りの雷ライアス、暗黒より生まれし魔メルティカ、私のもとへ馳せ参じたまえ！！」

「グァァ——ッ！！」ライアスとメルティカが出てきた。ライアスは山吹色の可愛い色をしている。

「やっておしまい、ライアス、サンダー乱れ撃ち！！」

「リーゼルエルキューサー！！」

死神はテレポートし、私たちの視界から消えた。ライアスの雷はミノタウロスナイトに直撃した。2体のミノタウロスナイトが消滅した。私は立て続けに雷を放つ。ルミナスは詠唱を続けている。

「眠れる木々よ、目を醒ましなさい！！！」フィルは木々を呼び覚まし、辺り一帯に爆発的に木々が育った。木々はミノタウロスナイトにまわりつき、剣で応戦するものもすごくうざそうだ。

死神は HP を半分にする呪いを放ってきた。俺は昔奪った魔法反射でエストリアと俺を守り、死神の HP を半分にしたが、ルミナスとフィルは食らってしまった。そしてリーゼルエルキューサーを続ける。ミノタウロスナイトはもう MP が切れただろうな。

「フルムーンショット！！」ルミナスの詠唱が完了し、白い満月が浮かび上がり、そこから光の筋がミノタウロスナイトと死神を討つ。月の光は見えない敵が見えるようだ。

木々は槍となり、ミノタウロスナイトを襲う。ミノタウロスナイトはそこら中で串刺しの憂き目にあっていた。

「みんな HP が下がったようだなァァ！！ デッドエンドキル！！！！ ヒャハハハハハ！！！！」ルクスの即死魔法で HP15 %以下になったモンスターたちはすべて消滅した。残党も私の雷がすべて一掃する。こうして戦闘が終わり、魔晶石が当たり一面にカランと落ちた。

「フィル、ルミナス、大丈夫？」私は HP を半分にされてしまった、フィルとルミナスをかばった。

「大丈夫です。木々の癒し！！」フィルの放ったヒールが私たちを癒す。「木々の癒しの回復量は辺りにいる木々の量で決まるんですよ♡」

「おお……！」ルクス君が感心している、こら、感心するな！

召喚士エスティアと愉快な仲間たち（試し読み）

著 者 林愛根

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
